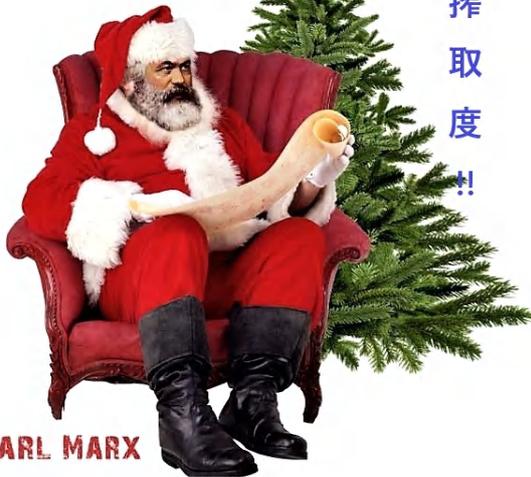


Merry
Christmass



労働力
の
搾
取
度
!!

DAS KAPITAL

12月開催の 第22回「資本論を読む会」は

日時：2020年12月22日（火）。

午後6時から。リモートで開催します。

第7章 剰余価値率 第2節からやります

※新しい参加希望者にも「招待状」を
出しますので事務局までご連絡下さい。

11月「読む会」は9人でリモート開催。
…更に新しい仲間が参加しましたよ!

コロナ感染拡大のため、11月18日(水)の第21
回「資本論を読む会」は急きょ、リモート(ズーム)
での開催としました。おかげで?これを機会にと
試運転参加をしてくれた仲間が更に1人増えて、9

人での勉強会となりました。読み合わせしたのは「第7章第1節 労働力の搾取度」。相変わらず(恐れ多くも)「マルクスの書き方の難解さ」に文句が出て、「イヤ当時の論争が背景にあるからしょうがないんじゃないの」との弁護も。この節は「剰余価値率と利潤率、搾取度」の区別が…?

ということで、今回は「第7章第2節から」。有名な「シーニョアの最終一時間」(第3節)が出て
来ます。リモートで開催しますので、全道どこからでも参加できます。参加を希望する方は、支
局・社青同の事務局に、お気軽に連絡を下さい。招待状をお送りします。

☆「資本論を読む会」のこれまでの資料は下記ホームページでご覧になれます。

◎ <http://socialistho.cafe.coocan.jp/>「資本論を読む会」オープン・コーナーにあります。

パスワードは不要で閲覧できます。

レポーターから

第七章 剰余価値率 第一節 労働力の搾取度

<剰余価値考察の諸問題>

「剰余価値m」は、「生産物価値 (c + v + m)」が、「生産諸要素価値 (c + v)」を超える超過分に見える。しかし、いくつかの規定が必要。

前提①：まず「減価償却価値」の問題。通常、cには償却価値を使う。

前提②：不変資本価値cは再現するだけだから、「新たな価値生産物」は「v+m」だけ。

困難①：現実の価値変化・「v → v + m」は、前貸総資本も増大・「C → C+m」するので「曖昧になる」。だから、剰余価値生産過程の分析には、不変資本価値を「完全に抽象(ゼロ)すること」が必要。

困難②：「可変資本 90 ポンド」は「不変量」なのに、「可変量」として取り扱う不合理。可変資本は、この価値が通過する「過程」の「象徴」。

※「過程」：可変資本価値→労働力取得→使用価値の「生きた労働」取得→対象化された「v + Δv」取得

※「象徴」：可変資本でこの「過程」を取得：「資本の立場」では資本の自己運動。だが、本質は「搾取」。

「自己増殖する価値という矛盾」を持つ可変資本は、資本主義の矛盾の「一つの表現」に過ぎない。

<結論・概念規定>

剰余価値mの量と比率は、明らかにvに規定されるので、m/vを「剰余価値率」と名付ける。

新たに作られる価値で、前貸し可変資本を再生産する部分、を「必要労働時間」「必要労働」と名付ける。

必要労働時間は、「労働の社会的形態」からは独立している

※その社会を維持するための必要労働は、どの生産様式にも超歴史的に存在する。

必要労働を超え、資本家の剰余価値を形成する労働日部分を、「剰余労働時間」「剰余労働」と名付ける。

「剰余価値」を「対象化された労働時間：商品が持つもの」と理解することが、「決定的に重要」。

※「抽象的労働時間」「剰余労働時間」は全社会共通。資本主義の特殊性は、それが「物に対象化し商品が持つ」ことで、「価値」「剰余価値」となることにある、という理解が決定的に重要。

①剰余価値率 = m/v = 剰余価値/可変資本・・・対象化された労働の形態・価値、による表現。

②剰余価値率 = 剰余労働/必要労働・・・流動的な労働の形態・労働時間、による表現。

※唯物史観とマルクス経済学：唯物史観としては、②階級社会での「剰余労働」搾取の一般性が重要。

また資本主義分析としてのマルクス経済学としては、①の「剰余価値」の発見が重要。

剰余価値率は、「搾取度の正確な表現=搾取率」である。

(Tak)